

巻頭言



幼稚園の運動会

木村 幸男†



徒競走の一番目の組がスタートした。一番先頭を走っている子は減法早い。しかし、ゴールに来てから、通せんぼをしている紐の回りを巡って観察し始めた。応援席の「早くテープを切れ」と言う声は、一向に聞こえないようだった。彼は、非常に早くゴールの所に来ていながら、何のための通せんぼかを念入りに調べた。テープの向こう側は、スキーのゲレンデの外側と同じで、初めてテープを切ろうとするその子にとっては、危険地帯であったかもしれないのだ。

私の尊敬する大切な知人で、常にこういう問い掛けをしている人がある。物事を理解するにも、その知識を社会に役立てるにも、因って来る元の意味を常に問い直し、土台を確実にすることが、先を駆ける人の責務である。知識の積み上げはもちろん必要なことであるが、その土台がずれたり、小さ過ぎると、いつ倒れるか分からない。

学会は、さすがに、常に、その *Raison d'être* を問い続けている。前役員巻頭言によると、学会は、会員のため、学問のため、社会のためにあるとする。いずれにプライオリティをつけても、学会が活動を行うためには、人・金・物が絶対に必要となる。大会、研究会、国際会議など企画から終了までを想起してみるまでもない。

明らかに、会員がいなければ学会は成り立たない。では、会員がいれば学会活動は可能であろうか。活動には、費用がつきものである。会員個人にまつ費用は、個人が負担することはできるが、会場の借用、論文集の印刷・製本、その他の活動支援費など共通な費用や物は、会員個人が負担するには、その荷が重過ぎる。そこで、活動共通費を賄う会費が必要になる。ここで、活動の費用が足りなかったら、会費を上げれば良いと言う安易な提案が出る。この提案は、学会の会費が活動を忠実に反映する指標であることに考えが到らない提案である。なぜなら、費用／効果の原則が

効き、情報処理学会の会員を辞める人が出る。つまり、このとき、会員資格とお金とが同等のウェイトを持つこととなる。学会会員の客観的価値とは、学会そのものの価値であることを知るべきである。学会の価値を上げずに、会費だけを上げれば、学会を辞めていく人が増えるのは当然の帰結である。

学会費を払っているから、好きな学会活動をして、それを使用するのは当然であるという考えには、大切なことが一つ抜けている。その好きな学会活動が、学術の価値を高めているかどうかを、問われていることを忘れてはならない。もし、その活動が学術の価値を高めていけば、これを支援する仲間はずっと増え、その活動はさらに発展するであろう。

当学会は、電子計算機などを中心とした情報処理に関する学術、技術の進歩発達をはかり、知識を交換することが目的であるが、その活動をするごとに費用が発生することも、また、事実である。学会活動をするためには、お金が要る。お金は天から授かるものではない。やりたいことをするには、少なくとも基本部分は、自らの責任において用意することが必要である。これらのことが、可能な範囲において、学会活動は活発化することができる。先人の遺産を喰い潰すことなく、融通の利く土台をさらに大きくする位の気概を持ち、自分達のは、自分達で責任を持つのが、学会を先導するリーダーたちの一つの役目であろう。

組織が大きくなり、その運営が定型化すると、常識が大手を振ってまかり通り、その後ろを黙って歩けば怪我がないと考えがちである。学問も組織も、個人と同じように、生きて動いている。数年前の常識は、どんどん古くなり、ずれてくる。学会の大会、研究会の種類、論文の質、財務基盤など、学会活動の土台や方向を調整するためにも、さきの幼稚園児の考え方は、必要であろう。